英語授業における Moodle 利用に関する教員の意識調査

土岸真由美・大澤　真也・岡田あずさ

（受付　2012 年 5 月 29 日）

1. は じ め に

広島修道大学では2007年度から「e-learning 英語Ⅰ・Ⅱ」と呼ばれる英語必修科目において既存のｅラーニング教材を用いた授業実践を行ってきた。そして年度ごとの省察に基づき，ｅラーニングの効果を高めるための改善を行ってきた。その流れの中で，単なる一方通行の学習に留まらない協働学習を可能にしてくれるのではないかという期待を込めて，2010年度より英語科目を中心に Learning Management System（LMS）である Moodle を試験的に導入した。そして2011年度より全学的に導入し，習熟度に応じてｅラーニングを活用する実践を行っている。

Moodle のような LMS を導入し，授業で活用できる環境を整えても，Moodle を積極的に利用する教員，一時期は利用していたがやめてしまった教員，また一度も利用したことがない教員などｅラーニングの利用状況は多様である。そこでこれらの教員がｅラーニングに対してどのような意識を持っているのかを明らかにし，今後のｅラーニングの普及およびその効果を最大限に活かせる環境づくりをしようと考えた。本論文の第一の目的は，Moodle の導入以降およそ２年間に，実際に授業で Moodle を利用した経験のある教員にインタビューを行い，Moodle に対して抱いている意識を記述することにある。そしてそのインタビューデータを基に，ｅラーニング普及のために必要となる示唆を得ることが第二の目的である。

2. 研 究 の 背 景

2.1　広島修道大学における Moodle 利用の実態

Moodle の試験的利用は，2010年４月から主に英語科目において開始した。2010年度のコース数は前期43，後期46，通年28（計117）あり[1]，そのうち英語に関するものは90コースである。2010年度に Moodle を利用したユーザは1,857名（学生1,835名，教員22名，管理者等のユーザは除く）であった。

1　コースはクラスに相当するものである。

2010年度の実践を基に，2011年度からは Moodle を全学規模で導入した。2011年11月時点におけるコース数は306で，そのうち英語に関するものは全学部対象の英語科目の78コースと英語英文学科の 9 コース，合計87コースである。2011年11月21日時点において Moodle を利用しているユーザは2, 727名（学生2, 684名，教員43名，管理者等のユーザは除く）である。

2. 2　Moodle 利用に関する教員の意識調査

ｅラーニングの活用状況については独立行政法人メディア教育開発センター（現放送大学 ICT 活用・遠隔教育センター）が2007年度に全国高等教育機関を対象に行った調査（『ｅラーニング白書2007／2008年版』に掲載）が参考になる。それによれば ICT 活用教育を導入しているもののｅラーニングを実施していない機関があり，その理由として「学内のインフラが整備されていないから」,「学内でｅラーニング導入に対する関心が薄いから」,「ｅラーニング導入のノウハウがないから」などが挙げられている。このことからｅラーニングを効果的に活用するためには，システムだけではなく教員ユーザの意識が重要であることがわかる。

広島修道大学における Moodle の利用も 3 年目を迎えた。コース数やユーザ数においては着実にｅラーニングの利用が増加していると言えるが，実際の利用状況や Moodle を利用している教員や学生の意識がどうであるかについては，これまで推測することしかできなかった。Moodle を利用して学習する側である学生ユーザを対象とした意識調査は，数は多くないもののいくつか行われており，それによれば Moodle は概ね好意的に受け入れられているようである（小寺，2008；寺嶋，2010）。一方，教員の意識に関して調査を行ったもの，特に定性的な調査を行ったものはあまり多くない（Cf. Kennedy, 2005; 山本，2004）。そこで Moodle に対する意識や利用状況を把握するために本学で Moodle を授業で利用したことのある教員 3 名にインタビューを行うことにした。

3.　調　　査

3. 1　調査の目的・手法

本調査における目的は Moodle を利用している，あるいはしていた教員の意識を調査し，今後のさらなるｅラーニング普及を目指すとともに，効果的な活用法を模索することにある。そこで，Moodle を利用した英語の授業を経験したことのある広島修道大学の英語教員 3 名（以下，Ａ，Ｂ，Ｃとする）を対象に調査を行った。教員Ａは，Moodle の導入に積極的にかかわり，授業内において Moodle を積極的に利用している教員である。教員Ｂは2011年度から Moodle を利用し始めたばかりではあるが，Moodle の利用に前向きな教員である。最後に教員Ｃは2010年度に Moodle を使い始めたものの，2011年度になって利用をやめた教員で

ある。

調査の手法としては半構造化インタビュー法を採用した。その理由は，今回の調査における目的は e ラーニングの普及および活用法を構築することにあり，そのためには教員の声を質的に分析する方が好ましいと考えたからである。インタビューは，教員それぞれに約30分間行った。主な質問項目は Moodle の利用状況，各自が考える Moodle を利用することのメリット・デメリット，そして Moodle を普及させるために必要なサポートについてであり，状況に応じて適宜新たな質問を行った。インタビューの様子は，対象者に口頭で了承を得た後，ビデオ録画し，それらを文字起こしした。

データの分析は Dörnyei（2007）にある質的分析の手法に基づき，1）Pre-coding（文字起こししたものを何度も読み直し，気付きや思ったことをメモに書き留める），2）Initial coding（文字起こししたデータを読み直し，重要な箇所や興味深い箇所に印を付け，余白にラベルを書き込む），3）Second-level coding（2 で作成したコードを並べ，グループ化できるかどうかを検討する），4）Growing ideas（1 ～ 3 の作業を基に分析的なメモを書き，カテゴリーやラベルの関連を視覚化する），5）Interpreting the data and drawing conclusion（インタビューデータを確認しながら結論を導きだす）の手順で筆者 3 名が議論をしつつ作業を行った。

3. 2　教員の Moodle 利用に関する意識

3. 2. 1　教員 A について

教員 A はこれまでにホームページを作成した経験があり，コンピュータの習熟度が非常に高い。e ラーニングの利用は Moodle が初めてであったが，2010年度に使い始めて以来，「使い始めから入り込めた」ようである。また Moodle の利用に関しては，マニュアルなどを読まなくても操作を「直感的に行うことができた」と述べている。教員 A は学内において Moodle を最も積極的に活用している教員の 1 人であるが，その理由の 1 つとして，教員 A の持つ指導理念が Moodle を利用することで実現できると考えている点が挙げられる。

> 学習ってまずインプットじゃないですか。インプットした中で気付きが起こんなきゃ理解に至らないわけだから，何か気付きを起こさせるような工夫を Moodle の機能を使ってやりたい。自律的な学習ができるように導きたい。しゃべって教えるんじゃなくて，なんか teacher じゃなくて facilitator だという表現がよくあるんだけど，teach するつもりはほとんどなくて，何かする，作業することで何かに気付いて，その中から自分が習得できるものを見つけて欲しい。

教員Aの主な指導理念の１つは，「インプットに基づく気付きを促す」学習であり，「自律的な学習」を促すために教員は facilitator であるべきだというものである。具体的に，90分の授業時間のうち Moodle を使った活動はどのくらいあるのかという問いに対して以下のように答えている。

> 今のクラス，レベル2[2] だからそれ以外全部 Moodle 上で何かしてます，学生は。たぶん疲れると思う。常に自分（学生）が何か作業をしてるような授業になってると思う。（中略）テキストはあるけど，テキストの問題はもう Moodle に載せてるんで[3]，テキスト開いてってことはもうなくって，Moodle 上で問題作って小テストで問題して。今日も Moodle 上で何かしてたら90分のうち１時間以上はたぶんしてると思う。私の授業のポリシーは，私はしゃべらない，説明しない。作業は学生がする，というので，極力説明はだらだらしないで，抑えて，やってもらうことで何かを学んでもらう形式。

このように，教員Aは授業時間内のほとんどにおいて Moodle を活用した授業を行っている。そのため，「（教員の）負担が授業内と授業外で逆転しているだろう」と述べ，授業内よりも授業外での準備が大変であることを指摘している。

それでは実際に Moodle を利用するメリットをどのように感じているのだろうか。

> 量は与えられるし，一人ひとりの学生が英語に接して英語で何かをするっていう作業量はすごく取れると思うんですよ，授業で。再履修クラスと比べたらたまにプリントでやらせて答え合わせしてっていってたらものすごい時間かかって１時間あっても１枚しかできなかったっていうような感じだけど，Moodle 使ってやると３倍ぐらいの量やってるので。

また以下の点もメリットとして挙げている。

> よく学習の個別化が完璧にできますよね，Moodle だと。いろんな使い分けができる。課題の出し方でもみんなに見える方式とフォーラムを使えばみんなに見えるし，オンラインテキスト使えばみんなに見えない形で出せるし。それを適宜使い分けることができるし。１コマの授業の中で学生が英語を使って何かしてる作業量は確実に増やせるとい

2　英語プレイスメントテスト（TOEIC Bridge）の結果により，レベル区分を行っている。レベル２はスコア134～138程度である。
3　出版社から Moodle 上に教材を掲載することについて承諾を得ている。

うのが最大の利点で。

このように，教員Aが Moodle を利用する上でメリットと感じていることは「インプットの増加」,「学習の個別化」などであると考えられる。一方で授業内において文法説明をほとんど行わず，自動採点機能による答えの確認も学生の自主性に任せていることから，次のような不安も口にしている。

ただ答え合わせも自動的にやって，それを自分で確認しといてねって，それも自主性に任せてるので，それで正しい理解をしているかっていうのは確かめようがないし，ちゃんとポイントに気付いてるかっていうのは確かめようがないので，不安は不安。

つまり作業量を重視し，答え合わせなどの時間を確保できていないため，学習の成果をどのように測定すれば良いかについて悩んでいると言える。それが，Moodle のデメリットは何かという問いに対する以下の回答に表れている。

デメリットは，だからそれで効果があがっているかっていうのが，そうじゃない方法と比べてっていうのが全く検証できないので。だからそれをアンケートを取りたいとは思うんですよ。でも毎回取って効果があがったと思いますかっていう時，大体レベルの２以上だったらポジティブな結果になるんですけど，どうしても記述式のコメントの中に１人２人３人ぐらいはもう嫌だ，っていうのがいるので，もうそれはもう合わないんだなっていう感じかな。やっぱり手で書きたいっていうのがどうしても１人２人は絶対にいるので。

このように，アンケートを取るなどの方策を取ってはいるものの，まだ十分ではないと感じているようだ。またｅラーニングを用いた英語学習に抵抗のある学生に対する配慮も垣間見ることができる。

次に，授業準備に関連する苦労などを聞いたところ，以下のような回答が得られた。

だから今朝２時から始めて今日の授業の準備が４時ぐらい，４時半ぐらいまでかかったから，１つの，１レッスン用２時間ぐらいかかってるっていうことかなあ。素材はあるんですけど，それを，まあ，あの，その日のセクションを埋めていく作業は２時間かかって，それがまあ一応同じのを，幸い今年は同じのを３クラス持ってるので，それ作ったのを全部インポートしていけば，１クラス分で作っとったらインポートしていけば良い

ので。でもまあ今日は時間がなくて急いだから 2 時間なのかもしれない。もしかしたら普段はもうちょっとかかってるかも。

また，次のようにも述べている。

今年やってみて思ったんだけど，1回作っとけば何年も使えるから良いと思うんですけど，私，去年使ったものを流用している部分もあるけど，ほとんど作り直しているのが多いんですね。だから 1 回作っとけば，あとが2，3年楽とかっていうのがなくて，毎年やりたいことがちょっとずつ変わってきて，自分もちょっとずつ進歩して，ここもうちょっと変えたいとかになるんで，結局そんなに楽は，そういう部分での楽はできない。素材集め，何か良い動画とかいうのは毎年使い回しはできるんだけど，教材そのものはね。問題なんか，小テストなんかは全部作り直している。効率悪い。

教員 A は，「授業に立っている時は楽だけど，準備に（時間が）かかっている」とも述べているように，ｅラーニングを授業で用いる際の授業準備に負担を感じているようだ。

そこで，ｅラーニングを活用してもらうためにはどのようなサポートが必要かを尋ねたところ次のように答えている。

問題作るための単純作業の部分よね。だから，あの，英文持ってきて，とりあえずテキストファイルに置いといて，そこから何かいろんな問題作っていくんだけど，英語の素材を問題化する前の処理の下準備とか，かな。あと素材集めとか。コース作るのはどうしてもやっぱり自分自身でしょ。（中略）本当に全部わかっているような人が，ここはどういう設定にしたら良いかとか，聞いて答えてくれたらそりゃ良いですね。

教員 A は授業時間のほとんどを Moodle を利用した活動にあてており，そのための準備におけるサポートがあれば助かると述べている。これは Moodle に限らずｅラーニングを行う際に解決しなければならない問題かもしれない。

3. 2. 2　教員 B について

教員 B は2011年度から Moodle を利用している。教員 B のコンピュータの習熟度はそれほど高くないが，学内で行われた Moodle ワークショップに参加するなど以前から Moodle には興味を持っていたようである。それは「CALL は一通りやったので，CALL プラス Moodle でどんなふうに使えるか」という教員 B の言葉にも表れている。また「教員 D（Moodle を

以前から授業で活用している教員）に影響を受けた」とも述べているように，教員Bは Moodle を使う上で教員Dからのサポートを得ることができた。そのため，新しいことへのチャレンジとして積極的に Moodle を授業に取り入れることができたようである。

教員Bが授業中に活用する Moodle の機能は主に小テスト，毎時の目標や授業の流れの提示，課題や教材の提供である。教員Bの持つ指導理念は以下のようなものである。

> 私，コースが，自分でこうやって作って，今日何をやりますとか，こういう感じでっていう流れを最初から最後まで学生がもういっぺん見れる，見るかどうかはわからないにしても，そういう形ってすごく大事だと思うんですよ，大学教育において。おそらくそういうことって記憶から消えていくし，なかなか意識してやる学生ってすごく少ないんだけども，たぶん大学の学びってそういうものだと思うんですね。それをちゃんと視覚化できて，もう一度振り返る。熱心な学生でもう一度最初のところから見てみようとか思ってくれるような学生がいるんだったら，こういうほんと，こういう構築型の学習って，私すごく意味があると思っているので，だからそれは私 Moodle はすごいと思ってたんですね。そこはもう全然 CALL と違うと思います。授業外でも入れるっていうところですよね。その学びをその週の 1 時間だけではないところからサポートできるっていう意味で，Moodle はそういう意味ではすごい画期的だと思います。

このように，教員Bは Moodle を利用すれば学生がこれまでに何をやってきたか「視覚化」して「振り返る」ことができる「構築型」の学習が可能であることに大きな魅力を感じているようである。また学生が評定機能を用いて自らの学びをいつでも確認できることについても「トータルで自分の授業の評価とかプログレスっていったことを学生が自分で把握しながら学べる」として評価している。

教員Bは CALL を用いた授業経験が 4 年ほどあり，教材配布や授業外の活動については以前から不便を感じていたようである。Moodle を利用すると授業外でも教材の閲覧が可能である点や，それらを学生がいつでもダウンロードするなどして自由に活用できる点，さらにトピックアウトラインに示された授業の流れや目標を随時確認することができ，過去にさかのぼって振り返りを行うことが可能である点などを非常に高く評価している。

> 大学での，ちょっとシステマティックなっていうんですかね，学習のサポートができる。最初からずっと項目など書いていけるわけですもんね。で学生がまた振り返り学習ができたりとか，その教材等の自律的な，自分で取っていけるとかね，そういうサポートができることですよね。そのコンテントも充実することができるし，音声なども今までと

違ったやり方で配布できるから，内容的にはすごく良いと思うんです。

一方で学生の e ラーニングに対する意識について次のように述べている。

「e-learning（英語Ⅱ）」は結構みんな慣れれば小テストとか簡単にできるんですけれども，なんかいまいち受けが良くなかったっていうか，学生のモチベーションにももちろんよるんですけど，パソコン自体やっぱり苦手意識持ってる学生が多いっていうのもあって，なんかいまいちね，「e-learning」では Moodle 好きじゃないって言う子が多かったんですよね。（中略）なんか黒板使って本当にオーソドックスな授業をやっていた時の方が，（学生は）なんかついていきやすかったというか，人間ペースっていうか，楽だったって言ってるような学生も，そういう声も少なくなかった。

教員 B 自身は積極的に Moodle を利用したいと考えているが，教員 A と同様，学生の反応が気になっているようである。

教員 B は Moodle における小テストの自動採点や評定の機能に着目しており，自作した小テストの難易度の検証や学生による授業の理解度などの省察にも役立てようと考えている。

あれは私も毎回出てくるので見ていて，それで自分のテストがちょっとバランスが悪かったんだなって，作り方が良くなかったとかっていうのもよくわかって，そういう意味ではすごく勉強になっているんですけれど。

しかし，Moodle では細かい設定が可能であるがゆえにコンピュータの習熟度があまり高くない教員 B にとってはデメリットに感じる部分もあったことが以下の発言からうかがえる。

でもね，やっぱりクローズドなテストにしても，いろいろ設定があって，ちょっと 1 個間違うと小数点が出てきたりとか，1つクリックするのを忘れちゃったりすると大変なことになりますよね。で学生も何だこれはって大騒ぎになったりとか。だから学生にも結構迷惑をかけたような気がするんですよね。だからもう少し使い慣れると良いんでしょうけど，ハードル高いですよね，Moodle ね，そういう意味ではね。

また，主に利用している小テスト機能について以下のように述べている。

穴埋めの問題とかで，答えの可能性を結構たくさん入れておかないといけない場合とか

があって，そういうのはもしかするとペーパーで，小テストやっちゃう方が，人間が臨機応変にこれも行けるしこれも行けるし，というふうにできると思ったんですけども，なんせそういうのも知らずに始めちゃったもので。（中略）毎回学生にやった後に「先生これはどうですか。×って出たけれどこれでも良い気がします」って言われて，一人ひとり見ながら「そうですね，これはじゃあ１点追加にします」とかって言いながら，なんか結構余計な作業が多かったなというのがあるんですよね。だからそれはもう使い方で，もしかするとこういうテストの場合はもうこれは使わないって決めて，自分でその用途をよく理解した上で使うと，問題がないのかもしれませんけども，だからやっぱりかなり考えないといけないってことだと思うんですよね。何でも良いからまあやってみようってとかでは（使えない）。

このように，小テスト機能でできることとできないことを理解していないために，かえって負担が増加してしまったと感じている。またそれ以外のデメリットとして以下のように述べている。

デメリットはたぶんテクニカルなことですよね。私がサポートしきれない，内容以外のところで，例えばその，（Moodle のバージョンアップによって表示）形式が変わっちゃったりとか，あとはやっぱり自分がやりたいことと Moodle の機能をどうやって一致させるか，そういうところの細かいサポートが受けられるかどうかというところで，私は今Ｄ先生とかいらしてくださるので助かってますけど，そういうのがなかったら難しくなると思うので。

このように，教員Ｂ自身のコンピュータやｅラーニングに対する習熟度の未熟さに起因する部分もあり，教員Ｄのサポートによって助けられている部分が多いようである。これは以下の発言にも表れている。

マンツーマンでＤ先生がいてくださったので，何かわからなければ彼女に聞いたりとか。（中略）いつも何かあると「先生すみません，これはどうするんですか」って常に質問して，あとは本を借りていたんで，こういうのがあるんだっていうのは一応一通り見ましたけど，やっぱりテキストで見ているのと自分で実際にやってみるとわからないところがどうしてもあるんで，Ｄ先生がデモンストレーションしてくださるって感じだったので，非常に助かりました。私は恵まれていたと思いますけど，みなさん直接気兼ねなく聞ける人とか，アドバイスをもらえる人が常にそばにいなければ最初は入っていきに

くいものなのかなと思いますけど，独学でされる方ももちろんいらっしゃると思いますけど，私はそういうタイプじゃないので，D先生がいなかったらたぶんできなかったと思います。

このような人的なサポートだけではなく，「Moodle 用の何か教材のソースを作ってシェアするとかができるとすごい良い」とも述べており，教材作成や授業準備への負担を感じているようである。これは以下の発話にも表れている。

これをやるんだったらこれがベストだとか，メニューから選ぶみたいに，できるようになるまでに，たぶんそれなりの時間と実践といろんなものがやっぱり必要になるかなと，その根気とか。だからそこまで，たぶんはたして時間を割ける先生がどれだけいるかなっていうのも思うし，今までのやり方で何が悪かったかっていうふうにね，よっぽどの反省があったりとか自分で欲するものがないと，そこには。別に普通の今までどおりのオーソドックスなやり方でだめってことはないですよね。

また教員Bはこれまでにシステム面でのトラブルによって Moodle にログインできない状況を何度か経験しており，学内の不安定なインターネット接続システムに対してもストレスを感じているようだ。

ただ危険なのは授業とかで Moodle にアクセスできない時とかがあったりとか。それがインターネットラーニング自体の問題だと思うんですけど。想定外ってことですよね。そういうことが必ず，結構もう最後の「e-learning」の授業って，最後 4 回ぐらい入れなかったりとか，すごい遅くって Moodle が。（中略）で，もう全然使えなかったんで，そのクラスは。じゃあ何のために学生に Moodle に入ってもらって，で，向こうもやっぱり不安だったと思うし，私もフラストレーションがたまったし。そういうテクニカルなところで，もう私の力が及ばないところで何かあった時に危険だと思ったので，自分で本当に今まで通りの授業ができる方がもしかしたらそういうストレスはないと思いました。

これは Moodle の問題ではないが，一度に多くの人数がアクセスをする際に，学内の無線 LAN やサーバに障害が起きる場合があり，対応に苦慮したようである。特に Moodle はインターネットに接続されていなければ使えない性質のものであり，このようなトラブルをできるだけ回避できるような環境を構築していく必要がある。

3.2.3　教員Cについて

教員Cはコンピュータの習熟度があまり高くなく，「パソコンは全部（嫌い）」と発言している。2010年度から Moodle の利用を開始したが，実際に使用した Moodle の機能は小テストのみで，その他には予定を記入してカレンダーとして利用したり，教材や資料を載せたりリンクを張ったりという使用方法に限られていた。2011年度からは小テストを紙媒体のものに戻したため，完全に対面式授業に回帰する結果となった。Moodle を使わない理由を教員Cは「普通の授業で不自由をあんまり感じないというか，もちろんそっちの方が楽だし，馴染みがあるので，それでそっちの方がやり易い」と述べている。

教員Cは多くの授業を CALL 教室で行っており，特に机の配置がアイランド式で学生が互いに向かい合っている形状の部屋を好んで利用している。また授業中には学生に声を出させて発音練習やシャドーイングを行っている。教員Cの指導理念をよく表している発言は以下のようなものである。

> その小テスト，私は小テストを授業中にやって，それの答え合わせをざっと授業中内に，ちょっと時間は取っちゃうんですけど，実施した後すぐやって，そこでもう1回答えをみんなで確認する。で，その教室の中でやるライブ感っていうか，みんなで「あー，誰々さんがこう言ってるな」とか，「おー，合ってたー，合ってたー」とか1個ずつそれを聞きながらとか，そういう感覚とはちょっと違う感覚で，（Moodle を使うと）ざっと採点されちゃうわけですよね。で，そうすると，なんかすごい授業に活気がなくなってしまって静かになっちゃって。

このように，Moodle などの e ラーニングを授業中に行うことによって，教室内での雰囲気が崩れてしまうことを懸念している。教員Cは以下のようにも述べている。

> まあその，効率とどっちを取るかなんだよね。私はその後やっぱり英語をしゃべらせたりとか，何かそういうふうにシャドーイングとかさせる，声出させたいから，ちょっとわーっとか，こう盛り上がったりとか，そういう空気を作っておきたいのね。クリックしてピャーッと出てきたら，はい終わり，でみんなパソコン閉じて，シーンって。で，しゃべろうって言ってもしゃべれないんだよね。（中略）そういう空気が作りにくい。盛り上がんない。本当の意味で盛り上がってる，授業が充実しているかどうかは別として，とりあえず空気がなんか何となく私は持っていきにくいなって。

教員Cは Moodle を使うことによって，教室内での「盛り上がり」に欠け，指導において重

点を置いているシャドーイングなどの「声を出す」活動につなげられないことをデメリットと感じているようである。

教員Cが思う Moodle を利用するメリットは以下のようなものであるが，あまり大きなメリットとは感じていないようである。

> テキストがあるし，学生は持っている。オンライン上でわざわざそれをやる意義っていうのが，手間と天秤にかけた時に，同じ問題をオンライン上でやらなきゃ意味がないのかなとか。ビャーっと答えて一瞬に出てくるぐらいしかメリットがない。（中略）そう考えるとそこまでメリットに感じない。何回もできる，そういう設定ができるかどうかもわからないけど，何回もできるってなってれば 2 回繰り返し，ただ学生がするのかなあとか，どういうふうにしたら繰り返しさせられるのかなあというのもわかんないので，まあ 1 回授業でやれば良いかなと。そうするとオンラインに載せる必要もないかなと。

教員Cが担当した英語の授業では共通のテキストがあり，出版社の配慮により，テキストの内容をオンライン上で利用することが認められている。Moodle を積極的に利用する教員Aがテキストの内容を利用した活動を考えている一方で，教員Cはテキストの問題をそのまま Moodle 上で再現することがすべてだと考えてしまっている。また Moodle の機能に対する知識もあまりないため，どのようにコースを設定すれば良いかがわからない様子である。

教員Cの感じるデメリットは Moodle で扱える小テストの種類の少なさ，そして教員Bと同じく，別解対応の難しさである。

> 小テストはやっぱり自動採点とかは便利かなと思ったので。で，データもそこに残るので私がいちいち転記する必要とかもないし，楽かなあと思ったんですけど。時間の省略にもなる，省けて，他の活動ができるかなと思って始めたんですけど，その採点の，まず出題の仕方が限られてるというか，決まったパターンでしかできないし。で，あの，例えば作文的なものを，ことを，小テストを，まあ日本語を与えて英語でっていう時に，別解ってその場でまた増えたりだとか，学生が「これはどうですか」って，「ああそれでも良いよ」っていうのがありますよね。それを追加した採点の方法っていうのが。（中略）もう点数付いた後に，はいじゃあってクリックしたら全部採点されますよね。で，その後，「これはだめなんですか」って，「ああ，それも良いやん」ってなった時に，それまたそれだけどっか紙にこの子のこれ 7 点は 8 点とかって書かんといけんとかいうふうにするとバラバラバラバラになって一元化もできないし，なんか学生はもう本当に大丈夫かなって思ったりもするし。そういうのがなんか面倒くさくって。紙だったら「そ

れ丸しといて」って言って丸で10点とかにすればで良いですけど。

またインタビューによって明らかになったのは，教員Cが考えるeラーニングとは，授業で使うようなものではなく，個人が自習をするタイプのものであるということである。それは「自習型以外のものが想像できない」という発言にも表れている。

教員CはMoodleを使うために必要なサポートとは何かという問いに対して以下のように述べている。

何を使ってどういった活動ができるのか。どの機能を使ってどういう活動が英語の授業，私の考える意味があったなとか。（中略）その機能と効果，実際の授業での活用の仕方が本当に知りたいので，ショーケースみたいなやつは，あ，なるほどって。（中略）あと素材。

教員C自身がMoodleやeラーニングに関するアイデアや知識の乏しさを自ら問題点として挙げているため，他の教員の授業内でのMoodle活用法を参観し，具体的な活用例を知れば今後の意識に変化が現れるかもしれない。

3.2.4　考察

３名の教員のインタビューデータを分析した結果，様々な要素が相互に影響し合っていることが明らかになった。コンピュータの習熟度や親密度，また新しいことに挑戦する意欲の高さなど，教員自身の背景は，Moodleに対する印象に影響を与えているようだ。そしてMoodleを使うことによって自身のMoodle利用，そして指導理念の省察へとつなげているようである。教員AはMoodleを直感的に使えるものだと思っているが，一方で指導理念は各教員で違うものであることから，Moodleを使うかどうかはそれぞれの判断であると考えている。教員BはCALLの利用経験もあり，Moodleに対する興味を以前から抱いていた。その関心の高さからか，「アイデアはあるので，それをどの機能を使って実現するか（知りたい）」とMoodleのまだ利用したことのない機能に対する興味を示している。教員CはMoodleだけではなく，コンピュータ全般に対する強い苦手意識を持っている。このような自身のコンピュータの習熟度，親密度の低さとeラーニングへの関心の低さから，「ただ使うだけだと学生がのってこない」と省察している。これはMoodleの問題というよりも，教員の背景によるものであると考えられる。

また，教員は自身の背景に基づいて指導理念を形成した上でMoodleを利用した実践を行い，それから省察を行い，さらなる実践へとつなげているようである。教員Aはオンライン

学習における教員の役割は facilitator であり，学習の個別化と作業量の増加がメリットだと考えている。そのため，Moodle の幅広い機能を授業中に活用し，学生はテキストを使わずオンライン上で作業を行うという実践を行っている。教員 B はインタラクティブな使い方を望んでおり，授業の最初と最後は必ず Moodle を使って音声を中心とした活動を行わせている。また上述したように，未知の機能についても今後活用したいという意識が強い。教員 C はオンライン教材を利用すると作業量を与えられるメリットはあるが，有効な使い方がわからないと述べている。そのためか，授業内では Moodle の小テスト機能のみ利用し，それ以外はウィークリーフォーマットをカレンダー代わりに利用するという非常に限定的な利用方法であった。

このように教員は自身の背景に基づき指導理念を形成し，実際に Moodle を利用した実践を行った後に省察をしている。そしてその省察に基づいて Moodle のメリット，デメリットを判断している。教員 A は Moodle のメリットは活動タイプによって目的に応じた使い分けができること，そして入力問題などができることであると感じている。そしてデメリットとしては授業外での準備の大変さや，学生の理解を確かめる方法の欠如を挙げている。教員 B は視覚化して振り返りのできる学習や，教材を 1 つのコースに一元化できることを Moodle のメリットだと感じている。デメリットは，教員 A と同じく授業準備の大変さや，通常の授業と比較した時の e ラーニングの効果，設定のミスによって生じるトラブルなどを挙げている。教員 C は Moodle のメリットはデータの整理などをする時間の節約であると感じている。そしてデメリットとしては Moodle を使うことによる授業内での活気の欠如を挙げている。

以上のことからわかるのは，Moodle をどのように活用するかは，教員自身の背景に大きく影響されているということである。またそれに基づいて授業での活用を行うため，当然のことながら，授業内での利用方法や認識されているメリットとデメリットは各教員によって異なったものとなる。デメリットとして注目すべきなのは，授業準備の大変さである。これは e ラーニングを導入・活用する際に直面する問題であり，解決しなければならない問題であろう。

4.　Moodle 利用促進に向けて

インタビューの結果から，今後の Moodle 利用を促進するためには主に 4 つのことを考える必要がある。1 つ目は素材や人材面においてのサポートである。e ラーニングに興味を持っていたとしても，授業準備などの負担が増えてしまえば，教員は Moodle の利用を躊躇するであろう。このことから，共有教材の作成や Moodle 上でのコースの作成などのサポートを充実させる必要がある。2 つ目は，授業内での活用事例の紹介である。Moodle は授業内で

活用できるシステムであるが，授業内で活用する方法についての明確なイメージを持てない教員も多い。そこで，Moodle を利用した授業を公開したり，ワークショップで授業の紹介をするなどの活動も必要かもしれない。３つ目は Moodle を利用した学習効果の適切な測定方法の開発である。これは Moodle を含む e ラーニングに共通する問題であるが，Moodle を利用した学習を行うことによって，従来の対面授業での学習よりも効果があがっているかどうかを検証するのは困難である。そのため，学習効果を適切に測定するための手法を検討する必要があるだろう。４つ目は教員および学生の満足度の向上である。Moodle を使ったとしても教員側の満足度が高くなければ，継続して使おうとは思わない。また Moodle を使った授業を受けた学生が満足していなければ，Moodle を利用した授業を行う必要はない。そこで，満足度を調査するだけではなく，満足度を向上させるための方策を考えていく必要があるだろう。

現在，これらの考察に基づき，いくつかの試みを開始している。主なものは小テストの問題作成ソフトの開発である。問題作成が容易に行えるようになれば，コンピュータの習熟度がさほど高くない教員にとっては使い始める契機となるだけでなく，Moodle を既に使っている教員の負担を軽減することができる。現在，開発したものを導入し，一部教員で試用を開始した段階である。また Moodle に関するワークショップを一昨年度から実施しているが，今後も継続して行い，授業内で Moodle の積極的な活用を行っている事例の紹介をしていく予定である。また，Moodle を利用した学習効果についても量的・質的に分析する予定である。現在 Moodle を使った授業を履修した学生に対するアンケートを実施しており，そのデータを分析するとともに学生を対象にして行ったインタビュー調査の結果を分析し，今後の Moodle 利用の促進につなげていこうと考えている。

参　考　文　献

Dörnyei, Z.（2007）. *Research methods in applied linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies*. Oxford: Oxford University Press.

経済産業省商務情報政策局情報処理振興課（編）（2007）.『e ラーニング白書 2007／2008年版』東京電機大学出版局.

Kennedy, D. M.（2005）. Challenges in evaluating Hong Kong students' perceptions of Moodle. ASCILITE 2005, *Conference Proceedings of Australian Society for Computers in Learning in Tertiary Education*, 327–336.

小寺光雄（2008）.「Moodle を利用した e ラーニング用英語教材の作成とその学習効果について」『福井工業高等専門学校研究紀要』, *42*, 51–59.

寺嶋秀美（2010）.「教育支援ツールとしての Moodle の使用について：システム構築と使用結果」『文化情報学：駿河台大学文化情報学部紀要』, *17*(2), 53–61.

山本洋雄（2004）.「e-Learning に関する信州大学教員へのアンケート調査報告」『信州大学教育システム研究開発センター紀要』, *10*, 61–84.

Abstract

Teachers' Attitudes toward the Use of Moodle in English Classes

Mayumi DOGISHI, Shinya OZAWA and Azusa OKADA

This paper describes the results of an investigation of teachers' attitudes toward the use of Moodle in English classes. The purpose of this investigation was to explore the practical use of this learning management system. These insights can be utilized to improve the popularity of use among teachers who have not discovered the beneficial uses to enhance language teaching. This study surveyed three teachers, A, B, and C, who have used Moodle in their English classes, and individually participated in the interview sessions. The interview data were transcribed and analyzed based on the method of Dörnyei (2007). It was discovered, via these interviews, that the teachers' attitudes toward the use of Moodle enables them to give much more input to the students and facilitates these students to be autonomous learners. However, research also revealed that it is difficult to measure the efficacy of using Moodle in the language classroom, and that there are some students who prefer conventional face-to-face style classes. Based on the findings, implications for using Moodle are suggested.